

横須賀市北東部の完新統と縄文時代の貝塚群

野内秀明*・蟹江康光**

Holocene deposits and Jomon-age shell mounds in northeastern part of
Yokosuka City, south-central Japan

YANAI H.* and KANIE Y.**

The northeastern part of Yokosuka City is situated on a land reclaimed since 1869. The subsurface topography of the area comprises narrow buried valleys extending SW-NE and wave-cut benches, as judged from the boring data. The Holocene deposits at three localities of the area were studied, and the paleogeography was reconstructed. Then, the changes of paleoenvironment were revealed by analyzed the pollen fossils and molluscan fauna collected from Ohtaki-machi. In the buried valleys of 9000-8000 yBP, a dry beach appeared following the transgression. Around 6600 yBP the beach was under water of a few meters deep with muddy bottom, and about 5500 yBP the area changed to a shallow coastal sea with sand and gravel bottom. The molluscan fossil assemblage in the Holocene marine environment is harmonious with the molluscan fauna excavated at the Jomon-age shell mounds. The pollen analysis shows that the vegetation of the surrounding area in 9000-8000 yBP was a temperate deciduous broad-leaved forest, and around 6600 yBP it has already turned to a warm-temperate laurel forest.

はじめに

神奈川県横須賀市の市街地は1869年以降に行われた埋め立て地に立地しているが、その地下にはボーリング資料の解析から、埋め立て地とその下の完新統下に南西から北東に開く幅の狭い埋積谷と波食台の繰り返される埋積地形が知られている(野内, 1989)。また横須賀市役所地下(蟹江ほか, 1985)、横須賀共済病院地下(蟹江, 1988)などで完新統中の軟体動物・花粉などの微化石分析がなされ、本地域の完新統の層相と完新世の環境変化に関する資料が増加している。本稿では、横須賀市北東部での新たに調査した3地点(横須賀市大滝町, 汐入町, 本町)の完新統および産出化石について報告し、完新世の自然環境の変遷および縄文時代貝塚とのかかわりを考察する。

現地調査に神奈川県立博物館の松島義章学芸員・三浦半島地盤研究会会員諸氏の、報告作成に齊藤恵子・田中直子氏の協力があり、感謝する。

試料の産地と地質

試料採取地点は、横須賀市大滝町1~2丁目(さいか屋デパート)、汐入町2-8、(ハーバービューホテル)、本町3丁目(ヨコスカシーウインド)の3地点である(第1図)。これらの地点は、いずれも埋め立てによる横須賀市北東部に位置しており、その地下には新第三紀の三浦層群逗子層を基盤として完新統が堆積している。

横須賀市大滝町(さいか屋デパート)(第2図)

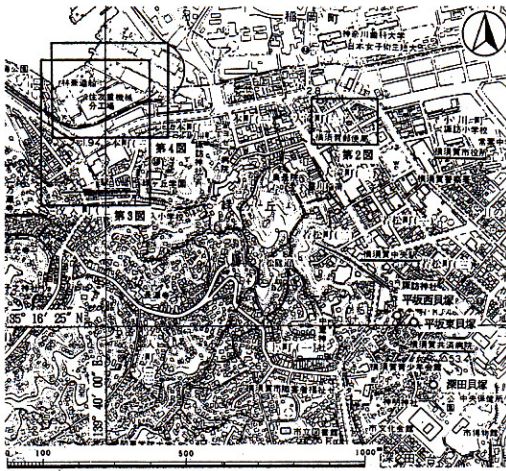
調査地域には、さいか屋デパート増築に伴う事前のボーリング調査で南西から北東に向けて深度を増す完新統下の埋積谷の存在が判明している(東京ソイルリサー

* 横須賀市人文博物館 Yokosuka City Museum, Yokosuka 238.

** 横須賀市自然博物館 Yokosuka City Museum, Yokosuka 238.

原稿受付 1991年9月30日 横須賀市博物館業績 第418号

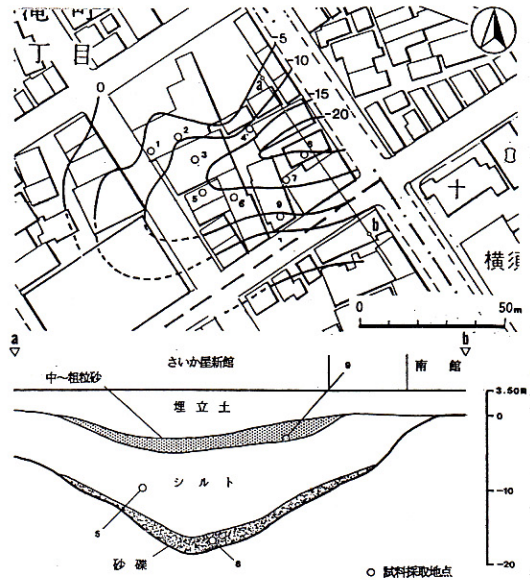
キーワード: 完新統, 貝塚, 三浦半島 key words: Holocene, shell mound, Miura Peninsula



第1図 横須賀市北東部における完新統の試料採取地点。
地形図は横須賀市1984年発行の1万分の1を使用。

チ 1987. 横須賀さいか屋東館・南館敷地地盤調査報告書)。調査地域での埋積谷底部の最深度は-21.0mであり、その南北に標高-6.5~-2.5mの深度を持つ旧波食台と考えられる地形が存在する。この埋積谷は現在の京浜急行線横須賀中央駅から横須賀市役所付近を経て旧小川港に至る平坂埋積谷(野内, 1989)の一支谷をなしている。

埋積谷は基盤層である逗子層の泥岩を刻んで形成され、その上には厚く完新統が堆積していた。完新統は谷部では下位から逗子層に由来する角礫を含む砂礫層、シルト層、礫まじりの中～粗粒砂層の順に堆積しており、旧波食台上では-3.0m付近まではシルト層が堆積し、それ以上の深度では埋め立て土が直接基盤岩を覆っていた。これらの堆積層は、埋め立て土を除いてすべて海成層であり、軟体動物化石を含んでいる。最下層の砂礫層は、-21.0~-8.0mまで谷地形の傾斜に沿って基盤岩に接して堆積しており、マガキが礁をなして産出し、そのほかにオオヘビガイなどが産出した。-17.5mの砂礫層(Loc. 8)産出軟体動物化石による ^{14}C 年代測定値は、オオヘビガイを試料としたもので、 $8180 \pm 150\text{yBP}$ である。このようなマガキ礁は後述する本町3丁目(ヨコスカシーウインド)の地下でも存在した。その上位のシルト層は、-13.0m~-3.0mに堆積しており、特に谷部で発達している。シルト層では軟体動物化石の産出は少なく、トリガイ、カガミガイなどが産出した。-9.0mのシルト層(Loc. 5)産出軟体動物化石による ^{14}C 年代測定値は、カガミガイを試料としたもので、 $6600 \pm 140\text{yBP}$ である。最上層をなす礫混じりの中～粗粒砂層は発達が悪く、埋



第2図 横須賀市大滝町における完新統の試料採取地点と地質断面。
基盤上面までの等深線の単位はm。地形図は横須賀市一国土地理院1984年測量の2500分の1国土基本図「中央」を使用。

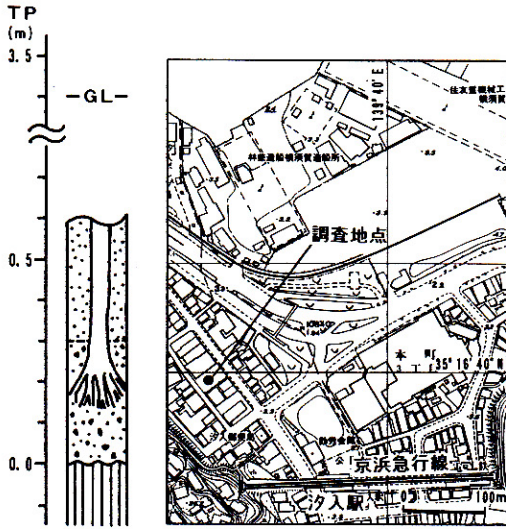
め土下0.0~-6.0m付近に堆積しており、イワガキ・ミルクイガイなどが産出した。-3.5mの中～粗粒砂層(Loc. 9)産出軟体動物化石による ^{14}C 年代測定値は、カガミガイを試料としたもので、 $5480 \pm 120\text{yBP}$ である。

横須賀市汐入町2-8(ハーバービューホテル)(第3図)

細粒砂が標高0.3mまで分布し、その下には標高0.0mまで礫質粗粒砂があり、基盤岩としての三浦層群逗子層に接していた。ケヤキと推定される直径約1mの幹が発見された。著者が調査した時には、残念なことにその大部分は工事の進行によって、既に破壊されていた。粗粒砂層の ^{14}C 年代測定値 $610 \pm 90\text{yBP}$ は、この木片を使用して測定した。

横須賀市本町3丁目(ヨコスカシーウインド)(第4図)

調査地域は1869年の埋立造成地である。埋め土の下には層厚10m以上の完新統が分布する。粗粒砂層の下部の標高-10~-11m付近にはマガキの化石が多量に産した。基盤岩の三浦層群は-14.6mおよび-17.1mに確認された。この産状は、本町3丁目の東南東900mの横須賀市役所地表下の標高-24.0~-25.0m付近(9160~8940yBP)のマガキ礁(蟹江ほか, 1985)、および本町3丁目の南東1400mの横須賀共済病院地表下の標高-7.8m(8950yBP)のマガキ礁(蟹江, 1988)の産状に比較でき、約9000yBPの堆積物である可能性がある。ボーリング



第3図 横須賀市汐入町2-8における完新統の試料採取地点と地質柱状図。地形図は横須賀市一国土地理院1984年測量の2500分の1国土基本図「中央」を使用。

調査で東に上流部をもつ谷があり、今回のベント(現場造成杭)工法#120および#165ピットはこの谷の中にある。#120ピットの標高0.1mから1869年頃の埋め土として利用された円礫が、また標高-7.6mから松丸太が見つかった。この丸太は、1871年に完成した横須賀製鉄所の船台の基礎杭の遺構と同定された(野内ほか, 1990)。

横須賀市大滝町古生物

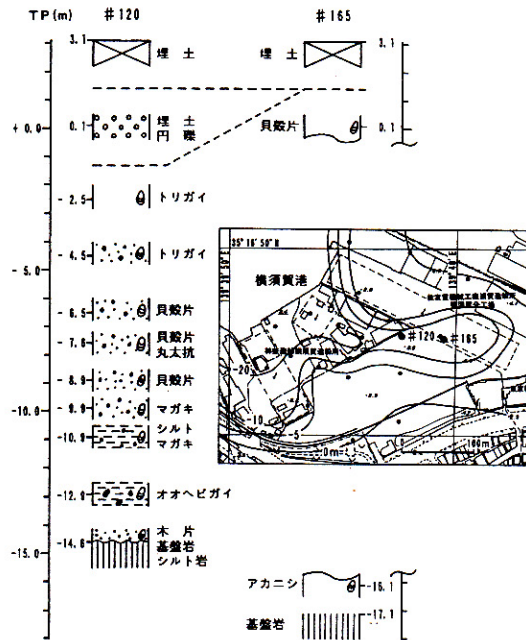
軟体動物

試料の採取は、工事の進行にあわせて各地層中の9地点(Locs. 1~9)で行った。各地点から産出した軟体動物化石(第1表, 標本番号 YCM-GP843~848)についての概略は、以下のとおりである。

-17.5m 砂礫層(Loc. 8) 殻高20cm前後(最大26cm)に成長した大型のマガキが礁をなして圧倒的に多産した。マガキ・ウミナなどの干潟群集が主体的な構成種をなし、これに内湾岩礁性群集のオオヘビガイ, 内湾泥底群集のアカシなどを少数伴っていた。

-12.0~-10.5m 砂礫層(Locs. 3, 4) 殻高10~15cmのマガキが多産し、イボウミナ・ウネナシトマヤガイ・アサリなど干潟群集が主体的な構成種をなしていた。他に、岩礁性群集のカリガネガイ・イガイ・オオヘビガイ, 上部浅海帯砂礫底群集のウチムラサキガイなどが伴い、Loc. 8に比較して多種の軟体動物化石が産出した。

-10.0~-9.0m 砂礫層(Locs. 1, 2) 殻高10~20cmの



第4図 横須賀市本町3丁目における基盤上面までの等深線図および完新統試料採取地点(#120, #156)と地質断面。

地形図は横須賀市一国土地理院1984年測量の2500分の1国土基本図「中央」を使用。小黑丸はボーリング地点。

マガキが多産し、イボウミナ・ウミナなど干潟群集が主体的な構成種をなしていた。他の構成種は Locs. 3, 4と類似するが、内湾泥底群集のイセシラガイがやや多かった。

-12.0~-9.0m シルト層(Locs. 5~7) 軟体動物は散在して産出した。内湾砂底群集のカガミガイ, 内湾泥底群集のトリガイ・ミルクイガイがやや多く、他にツメタガイ・イセシラガイなど内湾砂底ないしは内湾泥底群集が産出した。

-3.5m 礫混じり中~粗粒砂層(Loc. 9) 砂礫底群集のウチムラサキガイ・イワガキと内湾砂底から泥底群集のカガミガイ・ミルクイガイなどが多かった。また、ナミマガシワ・サザエなどの岩礁性群集も見られた。

節足動物

甲殻綱のフジツボ類が, Locs. 1, 2, 5, 7, 9で産出した。砂礫, シルト, 中~粗粒砂の各層から産出したが, シルト層に多かった。

海藻

Loc. 9の中~粗粒砂層から石灰藻のヒライボが産出した。

第1表 横須賀市大滝町の完新統産軟体動物化石(標本番号 YCM-GP843~848).

種名	層相	砂礫	砂礫	砂礫	砂礫	シルト	中粗粒砂
	標高(m)	-17.5	-10.5	-10.0	-9.0	-9.0	-3.5
	調査地点	8	7	1	2	5	9
棘皮類							
ウニ類 Echinoid							R
腹足類							
チグサガイ <i>Cantharidus japonicus</i> (A. ADAMS)					C	C	
コシダカガンガラ <i>Omohalius rusticus</i> (GMELIN)			R	R	R		
サザエ <i>Batillus cornutus</i> (LIGHTFOOT)							R
クマノコガイ <i>Chlorostom nigricolor</i> DUNKER				R			
スガイ <i>Lunella coronata coreensis</i> (RECLUZ)				R	R		
アラウズマキガイ <i>Pygmaeorota duplicata</i> (LISCHKE)			R		R	R	
オオヘビガイ <i>Serpulorbis imbricatus</i> (DUNKER)	A	C	C	C	R	R	
イボウミニナ <i>Batillaria zonalis</i> (BRUGUIERE)			R		R		
ウミニナ <i>Batillaria multiformis</i> (LISCHKE)	R				R		
オガサワラモツボ <i>Clathrofenella reticulate</i> (A. ADAMS)					R		
シマハマツボ <i>Difflaba picta</i> (A. ADAMS)						C	
ツメタガイ <i>Glossaulax didyma</i> (ROEDING)						R	R
タマガイ属 <i>Natica</i> sp.	C		C		R	R	
アカニシ <i>Rapana venosa</i> (VALENCIENNES)	R				R		
イボニシ <i>Reishia clavigera</i> (KUESTER)					R		
ムギガイ <i>Mtrellea bicincta</i> (GOULD)	R	C	C	C	R		
アラムシロガイ <i>Reticunassa festiva</i> (POWYS)			C		C	C	
ムシロガイ <i>Niotha livescens</i> (PHILIPPI)				C	R		R
クリイロマンジガイ <i>Philbertia lercherti</i> (DUNKER)						R	
斧足類							
コベルトフネガイ <i>Arca boucardi</i> (JOUSSEAUME)					R		
カリガネエガイ <i>Savignyarca virescens</i> (REEVE)	R						
イガイ <i>Mytilus corscus</i> GOULD	R						
アズマニシキガイ <i>Chlamys farreri</i> f. (GONES & PRESTON)				R			
イタヤガイ科 Pectinidae sp.	R	R		C	R		
ナミマガシワ <i>Anomia chinensis</i> PHILIPPI				R			R
イタボガキ <i>Ostrea denselamellosa</i> LISHCKE				R			R
マガキ <i>Crassostrea gigas</i> (THUNBERG)	A	C	A	A			
イワガキ <i>Crassostrea belcheri</i> (SOWERBY)							C
トマヤガイ <i>Cardita leana</i> DUNKER			R				R
ヤエウメガイ <i>Phlyctiderma japonicum</i> (PILSBRY)							R
イセシラガイ <i>Anodontia stearnsiana</i> OYAMA	C			C		R	
ウネナシトマヤガイ <i>Trapizium liratum</i> REEVE			C				
トリガイ <i>Fulvia mutica</i> (REEVE)						C	R
ウチムラサキガイ <i>Saxidomus purpuratus</i> (SOWERBY)			C	R			R
カガミガイ <i>Dosinia (Phacosoma) japonica</i> (REEVE)						C	C
スタレガイ <i>Paphia euglypta</i> (PHILIPPI)							R
アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i> (A. ADAMS & REEVE)			C	R			R
マツカゼガイ <i>Irus mitis</i> (DESHAYES)				R			
オニアサリ <i>Notochione jedoensis</i> (LISCHKE)			C				C
ミルクイガイ <i>Tresus keenae</i> (KURODA & HABE)							A
ヒメシラトリ <i>Macoma incongrua</i> (V. MARTENS)				C	R		
掘足類							
ヤカドツノガイ <i>Dentalium octangulatum</i> DONOVAN				R		R	C
甲殻類							
フジツボ類 Balanomorpha			R	C	C	R	R
カメノテ類 Lepadomorpha			R				
サンゴモ類							
ヒライボ <i>Lithophyllum okamurai</i> FOSILIE							C

A: 多産, C: 普通, R: 稀産.

花粉

花粉化石については、Loc. 8(砂礫層)、Loc. 5(シルト層)、Loc. 9(中～粗粒砂層)の3試料の分析を(株)パリーノサーヴェイに依頼した。

[分析方法] 湿重量約10gの試料について、HF処理→重液分離(ZnBr²:比重2.2)→アセトリスト処理→KOH処理の順に物理・化学処理を行い、花粉・孢子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を観察しながら、出現する種類(taxa)の同定・計数を行った。

[結果] 第5図に示した。3地点の試料は、いずれも花粉化石の保存状態は不良で、化石の花粉外膜が壊れているものや薄くなっているものも多かった。特に、Loc. 9の試料では、その影響を強く受けていて化石数も少なく、結果を統計的に扱うことを控えた。

Loc. 8(-17.5m, 砂礫層) 花粉化石群集の構成比は、木本花粉が80%以上と高率を占めた。各種類では、コナラ亜属が最も高率に出現した。次いでニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属が多産し、この他にアカメガシワ

属、アオキ属などを伴っていた。

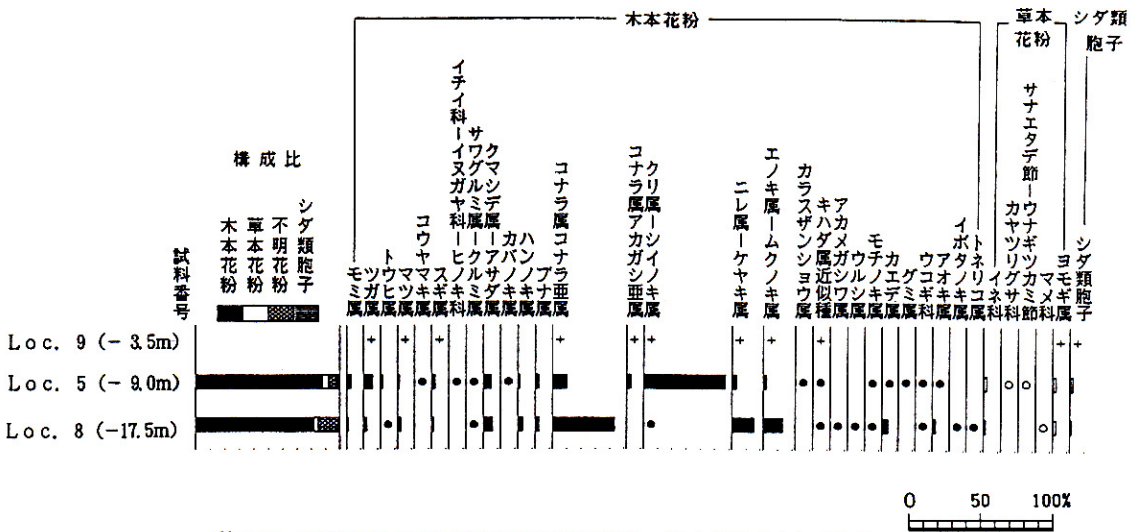
Loc. 5(-9.0m, シルト層) 花粉化石群集の構成比は、木本花粉が約90%の高率を占めた。各種類では、クリ属-シイノキ属(花粉の形態はシイノキ属に近似するものが大半を占めるが、保存状態不良のものも認められたため、両分類群を区別することは控えた)が優占した。ここでのクリ属-シイノキ属には、しばしば花粉塊として出現するものが認められた。この他にコナラ属、アカガシ属などを伴っていた。

魚骨

堆積物試料の洗浄過程で、Loc. 5のシルト層から魚骨片(脊椎骨)が産出した。破片のため、同定はできなかったが、小型の魚類であった。

¹⁴C年代測定値

試料は、大滝町(35°17'32"N, 139°40'30"E)ではLoc. 8(-17.5m)、Loc. 5(-9.0m)、Loc. 9(-3.5m)から得られた。汐入町(35°16'40"N, 139°39'50"E)では、ケヤキ片を試料とした。分析は、学習院大学理学部の木越邦彦氏に依頼した。結果(第2表)は次のとおりである。



第5図 横須賀市大滝町の完新統産主要花粉・孢子化石ダイヤグラム。

第2表 横須賀市北東部における完新統の¹⁴C年代測定値。

測定番号 Code no.	BP年代 (yBP) Libby year	地点 Loc.	標高 (m) Height	層相 Facies	試料 Specimen	学名 Scientific name
Gak-14357	610 ± 90	汐入町	-0.23	礫質粗粒砂	木片	—
Gak-14358	6600 ± 140	大滝町	-9.00	シルト	オオヘビガイ	<i>Serpulorbis imbricatus</i>
Gak-14359	5480 ± 120	大滝町	-3.50	中～粗粒砂	カガミガイ	<i>Dosinia japonica</i>
Gak-14360	8180 ± 150	大滝町	-17.50	砂礫	カガミガイ	<i>Dosinia japonica</i>

完新世の自然環境の変遷と縄文時代の貝塚

本稿で報告した3地区の完新統および産出化石から考察される完新世の自然環境の変遷は、横須賀市役所地下(蟹江ほか, 1985)と大滝町の資料で論じ、次に完新世の海岸環境の変遷に対応する本調査地域付近に残された縄文時代の貝塚について考察する。

完新世の自然環境の変遷

[約9000yBP] 横須賀市役所地下の-30~-24mの砂礫層である。海進初期の堆積層と考えられ、軟体動物化石はマガキを圧倒的多産種として、イボウミニナ・オキシジミなどで構成される干潟群集によって占められていた。また、-25.4~-25.0mと-24.0mの軟体動物化石群集では深度が浅くなるにつれて、干潟群集に加えてウチムラサキ・オオノガイなどの潮下帯群集が伴うなど、その構成種が増加していた。花粉化石では、コナラ亜属・ニレーケヤキ属が多かった。

約9000yBPには、海進初期の海面上昇によって、旧小川港から横須賀中央駅付近に向けて上流部を持つ平坂埋積谷に沿って海域となり、横須賀市役所付近に水深の浅い干潟域が出現した。周辺の植生は、温帯落葉広葉樹林であった(蟹江ほか, 1985)。

[約8000yBP] 大滝町の Loc. 8(-17.5m, 8180±150yBP)の砂礫層である。軟体動物化石はマガキを圧倒的多産種として、ウミニナなどの干潟群集で占められ、内湾泥底群集のアカニシなどを伴っていた。花粉化石では、コナラ亜属が最も多く、ニレーケヤキ属・エノキムクノキ属も多かった。横須賀市役所地下の-17.5mの¹⁴C年代値は6680±150yBPである。また年代の測定はなされていないが、市役所地下の-20.5mのシルト層産出花粉化石はシノキ属が多産し、その植生は暖帯照葉樹林を示していた。従って、コナラ亜属を含む大滝町の Loc. 8に対比される横須賀市役所地下の堆積物は-24.0~-20.5mの間に堆積したシルト層のいずれかに相当する可能性が高い。

約8000yBPには海面上昇が進み、干潟域がより深度の浅い地点に移動し、約9000yBPの干潟域は比較的水深の深い泥底に変化していたと考えられる。周辺の植生は約9000yBPから続いた温帯落葉広葉樹林であった。[6600yBP] 大滝町の Loc. 5のシルト層(-9.0m)および横須賀市役所地下のシルト層(-17.5m)の¹⁴C年代値は、それぞれ6600±140yBP, 6680±150yBPを示し、ほぼ同時期の堆積物層である。軟体動物化石・花粉化石の産出状況、産出化石の構成なども一致していた。軟体動物化石の産出は散在的であるが、内湾泥底群集・内湾砂底

群集がやや多かった。花粉化石はともにクリーシノキ属が多産種であった。また、横須賀市役所東部に存在した-10.0~-6.0mの埋積波食台にはシルト層がその上に堆積していることなどから、この時期以前に形成された可能性が高い。

約6600yBPには更に海水面が上昇し、干潟域は縮小して厚く堆積した泥底をなす内湾と変化した。当時南西部の丘陵部から張り出していた尾根の先(岬)では波食が始まり、波食台が形成されていた。周辺の植生は、温帯落葉広葉樹林から変化した暖帯照葉樹林であった。

[5480yBP] 大滝町の Loc. 9の中~粗粒砂層である。この年代は縄文海進の最頂期に相当するが、シルト層は既に波食台上を覆っており、ここでは水深の浅い海域が出現しており、かつての谷部に中~粗粒砂層が堆積した以外に海底での堆積はあまりなかったと考えられる。軟体動物化石は、砂礫底群集と内湾泥底群集および内湾砂底群集よりなっていた。また、-5.0~0.0mに存在する波食台はこの時期以降に形成された可能性が高い。

[610yBP] 汐入町の砂礫層である。汐入町での波食台は、その標高から海進の最高期に形成されたと考えられる-5.0~0.0mに分布する波食台と一連のものである。ケヤキ片による¹⁴C年代値610yBP頃には本地点は離水しており、波食台上には粗粒砂が堆積し、植物が根を張れるような環境が出現していた。

縄文時代の貝塚

横須賀市北東部を望む丘陵上には縄文時代の貝塚群が存在するが、これらの貝塚を残した縄文時代人にとって、完新世に出現した海岸線および海域は彼らの漁労生産基盤であったことから、貝塚出土の軟体動物相を中心に完新世の海域環境との関係は次のように考察される。

横須賀市北東部を望む深田台には、縄文時代早期前半の平坂東貝塚(鈕持・野内, 1983)、平坂(西)貝塚(岡本, 1949)、中期後半の深田貝塚(赤星, 1949)が存在する(第1図)。平坂東貝塚純貝層出土のマガキを試料とした¹⁴C年代は9600±170yBPであり、また平坂(西)貝塚は直接の年代値はないが、前後の土器型式に伴った年代値から約8000yBPと考えられる時期のものである(野内, 1990)。深田貝塚は、加曾利EⅡ式土器の貝層とされるが、同型式土器を出土する吉井第1貝塚上部貝層での¹⁴C年代値は4820±90yBP(野内, 1990)であった。これらの年代値から、平坂東貝塚・平坂(西)貝塚の形成された当時の海域環境は、約9600yBPから8000yBPまでの変化の中でとらえることができる。

平坂東貝塚と平坂(西)貝塚は、同じ丘陵上の東側斜面と西側斜面に残された貝層であり、本来丘陵上も含めて

平坂貝塚群として同一遺跡として認識されるべきものである。平坂貝塚群は、出土している土器型式から、第Ⅰ期(井草式土器)、第Ⅱ期(夏島式土器)、第Ⅲ期(平坂式土器)、第Ⅳ期(田戸下層式土器)の4文化期に分けられる。また、第Ⅱ期と第Ⅲ期、第Ⅲ期と第Ⅳ期の間にはおのおの型式の土器型式が存在するため、これらの文化期の間には時間的な断絶があった。

第Ⅰ期では明確な貝層が残されず、貝類採取については不明な点が多い。西貝塚混土貝層下部がこの時期に相当すれば、第Ⅰ期から貝類採取が始められ、第Ⅱ期に引き継がれた可能性もある。第Ⅱ期は、東貝塚純貝層および西貝塚混土貝層がこの時期に相当し、貝類採取が盛んに行われた。本期に採取された貝類は、マガキが圧倒的で、ハイガイ・オキシジミ・ウミナなどの干潟群集で占められ、他にアサリ・ハマグリなどの内湾砂底群集、そしてオオノガイ・アカニシ・レイシ・イタボガキなど10種が出土している。この貝塚出土貝類組成は、横須賀市役所地下の-24.0mにおけるマガキを多産種として、オキシジミが次いで産出し、アサリ・ハイガイ・アカニシなどが伴った軟体動物化石群集と調和的である。第Ⅲ期は、西貝塚純貝層が相当し、再び盛んな貝類採取が行われた。採取された貝類はマガキが主体をなし、オキシジミ・ハイガイ・ウミナなどの干潟群集を中心にすることは変わらないが、第Ⅱ期に見られた10種に加えてシオフキ・カガミガイ・ヤマトシジミ・ツメタガイ・イボキサゴ(岡本, 1949の原文ではキサゴ)など16種が増加し、内湾砂底～内湾泥底群集の採取が認められる。これは、大滝町の Loc. 8 での干潟群集の優占および横須賀市役所地下-24.0～-20.5m までの泥底域の拡大に対応するものと考えられる。第Ⅳ期の貝層は確認されていない。

このように縄文時代早期前半に残された平坂貝塚群出土の軟体動物群集は、遺跡のある丘陵下の完新世の軟体動物群集ときわめて整合的である。平坂貝塚群第Ⅱ期の縄文人の貝類採取地は平坂埋積谷に広がっていた干潟を中心としたものであり、そこに群生していたマガキがその採取の中心をなしていた。第Ⅲ期には、より丘陵に近くなった干潟域と泥底をなす内湾において貝類の採取が行われた。採取の対象は引き続いて群生していたマガキが中心であったが、泥底に生息する貝類も捕獲の対象とされた。

縄文時代中期後半の深田貝塚はカキを中心とした貝層であるとされるが、詳細は不明である。また、完新統についても試料が少ないが、当時の海岸環境は大滝町の Loc. 9 で5480yBP には中～粗粒砂層が-3.5m まで堆積しているように水深の浅い海域が出現していたと考えら

れる。この中～粗粒砂層はシルト岩の角礫を含むので、このような砂底に生息していたイワガキ・イタボガキなどを採取していた可能性があるが、その実態については深田貝塚の発掘調査に待たなければならない。

まとめ

1. 横須賀市北東部の大滝町・汐入町・本町の3地区において、完新統の堆積物を調査し、特に大滝町では軟体動物化石・花粉化石などの採取・分析を行い、その解析から完新世の古地理の復元を行った。
2. 大滝町の完新統の大部分は、8000～5500yBPの堆積物である。
3. 大滝町での解析結果と既報告の横須賀市役所地下での結果とあわせ、9000～5500yBPの自然環境の変遷を復元した。
4. 平坂埋積谷では、9000～8000yBPの海進に伴い干潟が出現し、6600yBPには水深数mの泥底域となり、5500年頃に水深の浅い砂底域となる海域に変化した。
5. 完新世の横須賀市北東部に出現した海域環境に残された軟体動物群集は、対応する時期の縄文時代貝塚出土の軟体動物群集と調和する。
6. 周辺地域の植生の変遷は、横須賀市役所での結果と矛盾なく、9000～8000yBPは温帯落葉広葉樹林であり、6600yBPには既に暖帯照葉樹林へと変化した。

引用文献

- 赤星直忠 1949. 神奈川県横須賀市深田貝塚. 日本考古学年報, (2): 59.
- 蟹江康光・松島義章・鹿島 薫・大森雄治・小島久美子 1985. 横須賀市役所地下における古生物と年代. 横須賀市博研報(自然), (33): 37-44.
- 蟹江康光 1988. 横須賀市米が浜通完新統の¹⁴C年代. 横須賀市博館報, (35): 1-2.
- 釘持輝久・野内秀明 1983. 横須賀市平坂東貝塚の概要. 横須賀市博研報(人文), (27): 1-14.
- 岡本 勇 1949. 相模平坂貝塚. 駿台史学, (3): 207-225.
- 野内秀明 1989. 三浦半島東部海岸地域における完新統と埋積地形. 横須賀市博研報(自然), (36): 53-67.
- 野内秀明 1990. 三浦半島における縄文時代の¹⁴C年代測定値について. 横須賀市博研報(人文), (35): 59-71.
- 野内秀明・安池尋幸・蟹江康光 1990. 横須賀市本町3丁目で見つかった横須賀製鉄所の造船台遺構(第30回郷土研究発表会要旨). 横須賀市博館報, (37): 31.